

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012 年度

課題番号：22792276

研究課題名（和文）日本で生活する外国人の保健医療福祉サービス利用に関わる文化変容尺度の開発

研究課題名（英文）Development of Acculturation Scale for Foreigners Living in Japan Related in Using the Health care Services.

研究代表者

呉 珠響（OH CHU HYANG）

首都大学東京 人間健康科学研究科 助教

研究者番号：80511401

研究成果の概要（和文）：日本の都市部で生活する外国人、特にフィリピン人と韓国人の日常生活や保健医療福祉サービスの利用状況の実態を明らかにした。また、彼らの文化変容についても整理した。その結果、フィリピン人、韓国人それぞれを対象とした研究では、文化変容のレベルは「統合」、「分離」に分類された。また、これまでに実施した調査により得られた結果から、日本で生活する外国人の保健医療福祉サービス利用に関わる文化変容尺度案を作成した。尺度の項目は4つのカテゴリー（アイデンティティ、社会関係、言語的能力、文化的能力）と20のサブカテゴリーに分類された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study were to examine the situation of lifestyle and using the health services for foreigners living in Japan, and to discuss the item which constitutes acculturation level and process for foreigners living in Japan. We found that Filipinos and Koreans living in Japan were classified their acculturation level into “integration” and “separation”, respectively. And we made the fundamental plan of the acculturation scale for foreigners living in Japan related in using the health care services. The items of the scale were classified in four categories (identity, social relations, language competence, cultural competence) and 24 subcategories.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：文化変容・定住外国人（外国登録者）・保健医療福祉サービスの利用

1. 研究開始当初の背景

2008 年現在、外国人登録者数は約 220 万人で、その数は年々増加しており、外国人登録者数の日本の総人口に占める割合は約 1.7%となっている（2008 年現在）。国籍（出身）別での登録者数は、中国、韓国・朝鮮、ブラジル、フィリピンと続いている（2006

年現在）。このような外国人登録者数増加の背景には、少子高齢化により日本が深刻な労働力の不足に直面していること、また、1980 年代後半から拡大した経済のグローバル化（佐藤忍、2006）により労働機会を求めて国境を越える人々の動きが加速したこと（井口敦彦、2005）、短期滞在予定の外国人労働者

が、さまざまな理由により日本での滞在が長期化する傾向にあること（法務省入国管理局、2002）などがある。

外国人の増加とともに、彼らが保健医療福祉サービスを利用する際に看護職が関わる機会も増加している。外国人の多くが保健医療福祉サービスを利用する際に直面する問題として、言語などの日本文化への適応や文化の受け入れなどがあげられる。文化への適応や受け入れについては、平野が在日フィリピン人労働者の受診行動について、受診行動を抑制する7つの要因を明らかにし、その一つとして、言語的な問題により自分の症状を説明しにくいことをあげている（平野、1998）。異なる文化をもつ集団または複数の個人が、連続的な直接的接触の状態になり、どちらかまたは双方のグループの文化パターンのその後に変化をもたらす現象（Redfield, et.al, 1936）を文化変容という。

欧米諸国では、文化変容と身体的健康、精神的健康、ヘルスサービスのそれぞれとの関係についての研究がなされてきた（Talya, et.al, 2003）。Suinnらは、アジア系移民の文化変容をアセスメントするため、the Suinn-Lew Asian Self-Identity Acculturation Scle (SL-ASIA)を開発した（Suinn, et.al, 1987）。SL-ASIAは、the Acculturation Rating Scale for Mexican-American (Cuellar, et.al, 1980)をもとに開発された尺度である。前述のとおり、日本で生活する外国人の増加とともに、保健医療福祉サービスを利用する外国人が増加している。看護職は人々の健康と生活実態を明らかにする際、生物身体、心理、社会、行動、スピリチュアルの5領域をアセスメントするという方法も報告されている（佐伯、2000-2004）。しかし、日本で生活する外国人の健康問題を明らかにする際には、彼らの文化変容レベルやプロセスの状況もアセスメントの項目としてとらえ、対象者を把握する必要があると考える。看護学の分野では、外国人の文化変容をアセスメントする手法や技術については十分に開発されてなく、また報告もほとんどない。

少子高齢化による労働力の不足、経済のグローバル化、短期滞在予定の外国人労働者の滞在長期化など、今度も日本に定住する外国人は増加することが予想される。本研究は、今後、定住者が増加することが予測される日本で生活する外国人の文化変容尺度を開発し、そのレベルやプロセスを理解することで、看護職が彼らの文化変容のレベルやプロセスを的確にアセスメントし関わることで、より個別性を踏まえた具体的な（効果的な）保健予防的介入が可能となると考える。

2. 研究の目的

日本で生活する外国人の保健医療福祉サービスの利用状況と文化変容の実態について明らかにするとともに、日本で生活する外国人の保健医療福祉サービスの利用に関わる文化変容尺度を開発することを目的とした。なお、尺度開発を最終目的として、以下を本研究の目的とした。

1) 日本で生活する外国人の保健医療福祉サービスの利用状況と文化変容の実態を明らかにする。

2) 日本で生活する外国人の保健医療福祉サービス利用に関わる文化変容尺度案を作成する。

3. 研究の方法

尺度作成を目的とし、①尺度項目の作成と選択（測定対象の明確化、項目候補の収集、予備データの収集、項目の決定）、②本調査の実施、③信頼性と妥当性の検討の手順に沿って進めた。今回は上記の尺度作成過程のうち①尺度項目の作成と選択（測定対象の明確化、項目候補の収集まで）を実施した。

(1) 開発する尺度の概念枠組み（測定対象の明確化）

本研究の測定対象を明確化することを目的として概念枠組みを検討した。

(2) 項目候補の収集

①文献検討による尺度項目案の収集（汎用性の拡大）

開発する尺度の内容妥当性を保証するため、先行文献からも項目案を収集した。文献検討では、関連尺度の項目や関連文献の記述内容を検討した。

a. 関連尺度の項目の検討

2000～2010年までに諸外国で作成された文化変容に関する尺度について、対象者の特徴、項目の内容、回答形式等について整理した。

b. 関連文献の検討

諸外国の特にアジア系移民の文化変容に関する文献検討を行った。

文献検討では、看護学、公衆衛生学、社会学、文化人類学、心理学分野の文献を収集して分析した。文献のデータベースはPubMedを使用した。

文献の収集期間は1990～2010年とし、キーワードを「Asian」、「immigrant」、「acculturation」と設定して検索した。

②インタビュー調査（日本で生活する外国人の健康や保健医療福祉サービスの利用状況の実態と文化変容の関係について）

研究対象者は、日本の都市部で暮らす外国

人登録者であらかじめ調査の趣旨を理解し、調査に同意する旨、意思表示した者とした。研究対象候補者は、日本の都市部にあるいくつかの外国人登録者が生活するコミュニティで生活しているか、もしくは都市部にある外国人登録者が集まる施設等を利用し、日本語での意思疎通が可能な者に限った。なお、研究対象者は外国人登録者の中でも上位にあるフィリピン人と韓国人とした。データ収集は、研究対象者に対する調査は、彼らが集まる施設や自宅にて、半構成的面接法により実施した。

a. フィリピン人の食習慣の実態と文化変容の関係について

都市部にある一施設に集まる 20 歳以上のフィリピン人を対象に、彼らの食習慣が文化変容によってどのように変化するかを明らかにすることを目的とし、インタビュー調査を実施した。

インタビュー調査で得られたデータは、Yin (2008) の部分的記述型のケーススタディのデザインを用いて分析した。データは、半構造的面接法により 6 人の都市部に暮らすフィリピン人から収集した。分析ではまず、ケースをカテゴリーに分け (4 つの文化変容レベル: 統合、分離、同化、周辺化)、グループ内の類似点、グループ間の相違点を検討した。次に、ケース間での比較を行い、類似しているケース間の相違点、相違しているケース間の類似点を探った。また、データソースでデータを分け、異なるデータからそれぞれの特徴を検討した。

b. 韓国人の保健医療福祉サービスの利用状況の実態と文化変容の関係について

日本の都市部で生活する 65 歳以上の韓国人を対象に、彼らの保健医療福祉サービスの利用状況と文化変容の関係について明らかにすることを目的とし、フィールドワークを実施した。

データは、韓国人の多くが生活する地域での地区踏査と、オールドカマーで 65 歳以上の韓国人高齢者 10 名を対象として半構造的面接法を用いたインタビューにより 2011 年に収集した。オールドカマーとは 1980 年代以前から日本で生活する韓国人を指す。一方ニューカマーは、日本の国際化に伴い 1980 年代末から来日した韓国人を指す。

まず、我々は韓国人が暮らす地域 (ホスト地域) の韓国人の受け入れ状況 (多文化、分離、つば、排除) について明らかにすることを目的としてフィールドワークによりデータを収集して分析した。次に、インタビュー調査で得られたデータを、Yin (2008) の部分的記述型のケーススタディのデザインを用いて分析した。分析方法は a. の手法と同

様に実施した。

③尺度案の作成

①、②を整理し、日本で生活する外国人の保健医療福祉サービスの利用に関わる文化変容尺度の案を作成した。

4. 研究成果

(1) 開発する尺度の概念枠組み (測定対象の明確化)

日本で生活する外国人の保健医療福祉サービスの利用に関わる文化変容の概念枠組みを特定するため、Berry の「文化変容モデル」を採用した。

Berry (1989) は、文化変容を個人と集団が自身の固有のアイデンティティや文化を形づくるために様々な伝統的文化、ホスト社会の文化の中で選択する機会を与えられることとし、文化変容の枠組みを「統合」、「分離」、「同化」、「周辺化」とした。また Berry (2005) は、集団レベルの文化変容を考える際は社会状況の確認が必要であることを述べている。また、文化変容は一次元、一方向なものではなく、多次元なもので相互的な概念である (Berry, 2006)。Berry はこれまでに、移民や難民などの長期の異文化滞在者を対象とした研究を重ねてきている。本研究の対象者も、日本への一時的滞在者ではなく、すでに日本で定住しているもしくは定住を予定 (希望) している外国人が対象となるため、Berry の文化変容モデルを採用することは、彼らの保健医療福祉サービスに関わる文化変容の尺度を開発する上で有効であると考えた。

(2) 項目候補の収集

①文献検討による尺度項目案の収集

a. 関連尺度の項目の検討

2000~2010 年に開発された文化変容に関する尺度を整理した。対象を特定していた尺度が 7 件 (Puerto-Rican, Asian American, Japanese American, Chinese American, Italian, Pakistanis in Canada) であった。また、質問項目は最大で 42 項目、最小で 4 項目、平均は 16.3 項目であった。質問形式は、多肢選択法または順位法が 9 件、リッカート法が 1 件、数値項目が 1 件、回答形式不統一が 1 件であった。また質問項目の内容として、文化変容態度・文化変容行動いずれも確認しているものが 7 件、文化変容態度のみが 6 件、文化変容行動のみが 4 件であった。

b. 関連文献の検討

104 件が検索され、そのうちアジア系の移民を対象としていなかった 46 件の文献を除き、合計 58 件が検索された。なお、検索さ

れた文献に、関連する 8 件の文献を加えて合計 66 件（看護学 22 件、公衆衛生学 9 件、心理学 20 件、ソーシャルワーク学 15 件）を分析対象とした。

文献検討の結果、文化変容はアジア系移民のさまざまな健康問題や健康行動に影響を与えていることが明らかとなった。研究対象としては、アメリカで生活する中国系移民、イギリスで生活するインド系移民であった。また世代としては、1 世を対象とした研究が最も多く、研究分野としては看護学がもっとも多かった。

②インタビュー調査（日本で生活する外国人の健康や保健医療福祉サービスの利用状況の実態と文化変容の関係について）

a. 日本の都市部で生活するフィリピン人の文化変容について

6 名の参加者は女性で 1 世だった。また 5 名は日本の企業で働いていた。参加者はフィリピン独自の食習慣を維持しつつも、伝統的な日本料理の一部を彼らの食習慣に取り入れていた。我々は参加者の文化変容レベルを「統合」「分離」「同化」「周辺化」のうち、「統合」、「分離」に分類した。「統合」レベルの食習慣の特徴としては、フィリピンの食文化を大切にしながらも日本の食文化を積極的に取り入れている傾向にあった。一方、「分離」レベルの食習慣の特徴としては、フィリピンの食文化を維持しつつ、必要に応じて日本の食文化を取り入れている傾向にあった。また、「統合」、「分離」レベル共にミリエンダというフィリピンの間食の習慣は現在も継続していた。

b. 日本の都市部で生活する韓国人の文化変容について

本研究では、すべての参加者が同じ地域で生活をしていた。参加者が生活する地域は、彼らを受け入れるホスト社会としては「分離」と「排除」の中間のレベルにあるとした。参加者のうち 7 名は女性、3 名が男性であった。また 6 名は 1 世で 3 名が 2 世、1 名が 3 世であった。すべての参加者は介護保険料を支払っていたが、一方で 8 名は年金受給資格がなく、年金を受給されていなかった。参加者は文化変容レベルの「統合」と「分離」に分類された。「統合」、「分離」レベルともに医療サービスは必要に応じて利用されていた。「分離」レベルの特徴としては、保健サービス、福祉サービスを十分に利用していない傾向にあった。その理由としては、これらのサービスを利用するための情報を得られていないことがあげられた。

③尺度案の作成

これまでに実施した調査により得られた結果から、日本で生活する外国人の保健医療福祉サービスに関わる文化変容のレベルやプロセスを構成する項目に関する検討を行った。その結果、尺度の項目は 4 つのカテゴリー（アイデンティティ、社会関係、言語的能力、文化的能力）と 24 のサブカテゴリーに分類された。

〈日本で生活する外国人の保健医療福祉サービスに関わる文化変容尺度案〉

1. アイデンティティ

1) あなたが生まれ育ったところはどこですか。

- (1) 日本
- (2) 母国
- (3) 日本と母国どちらも
- (4) 日本と母国以外の国

2) あなた自身はどこに所属していると認識していますか。

- (1) 日本
- (2) 自分の国
- (3) 日本も自分の国もどちらも
- (4) どこにも所属していない

3) あなたの母親はどこに所属していると認識していますか（していましたか）。

- (1) 日本
- (2) 自分の国
- (3) 日本も自分の国もどちらも
- (4) どこにも所属していない

4) あなたの父親はどこに所属していると認識していますか（していましたか）。

- (1) 日本
- (2) 自分の国
- (3) 日本も自分の国もどちらも
- (4) どこにも所属していない

5) あなたは自分の国に対してどれだけの誇りをもっていますか。

- (1) 非常に誇りをもっている
- (2) ほどほどに誇りをもっている
- (3) ほとんど誇りをもっていない
- (4) まったく誇りをもっていない

2. 社会関係

1) あなたは近隣の日本人と関わる機会がありますか。

- (1) とてもある
- (2) 時々ある
- (3) ほとんどない
- (4) ない

2) あなたは近所の同郷の人と関わる機会がありますか。

- (1) とてもある
- (2) 時々ある
- (3) ほとんどない
- (4) ない

3) あなたは家族以外とはだれと関わること

- が多いですか。
- (1) 日本人が一番多い
 - (2) 同郷の人が一番多い
 - (3) どちらとも付き合うことが多い
 - (4) どちらとも付き合うことはない
- 4) あなたが家族以外で一番信頼している人はだれですか。
- (1) 日本人の知人
 - (2) 同郷の知人
 - (3) どちらも信頼している
 - (4) どちらも信頼していない
- 5) あなたは近所のお祭りや自治会活動には参加しますか。
- (1) よく参加している。
 - (2) ときどき参加している。
 - (3) ほとんど参加しない。
 - (4) 参加しない。
- 6) あなたは近所のお祭りや自治会活動には参加したいと思いますか。
- (1) 積極的に参加したいと思う。
 - (2) 誘われれば参加したいと思う。
 - (3) 誘われても参加したいと思わない。
 - (4) 絶対に参加したくない。
- 7) あなたは健康に関して困ったことがあった時、誰に最初に相談しますか。
- (1) 主治医
 - (2) 家族
 - (3) 家族以外の同郷の知人や友人
 - (4) 日本人の知人や友人
- 8) あなたは病院以外の公共のサービス（区役所、保健所、福祉事務所など）を利用していますか。
- (1) よく利用する。
 - (2) ときどき利用する。
 - (3) ほとんど利用しない。
 - (4) 利用しない。
3. 言語的能力
- 1) あなたは家族との会話では何語を使用することが多いですか。
- (1) 日本語のみ
 - (2) 自分の国のことばのみ
 - (3) 日本語と自分の国のことばの両方
 - (4) 他の言語
- 2) あなたは家族以外の同郷の人との会話では何語を使用することが多いですか。
- (1) 日本語のみ
 - (2) 自分の国のことばのみ
 - (3) 日本語と自分の国のことばの両方
 - (4) 他の言語
- 3) あなたは日本語と自分の国の言葉では、どちらを使用することが多いですか。
- (1) 日本語のみ
 - (2) 自分の国のことばのみ
 - (3) 日本語と自分の国のことばの両方
 - (4) 他の言語
- 4) あなたは日本語と母国語を読むことができますか。

- (1) 日本語のみ読める
 - (2) 母国語のみ読める
 - (3) 日本語も母国語も不自由なく読める
 - (4) 日本語の方が母国語よりも読める
 - (5) 母国語の方が日本語よりも読める
 - (6) どちらも読めない
- 5) あなたは日本語と母国語を書くことができますか。
- (1) 日本語のみ書ける
 - (2) 母国語のみ書ける
 - (3) 日本語も母国語も不自由なく書ける
 - (4) 日本語の方が母国語よりも書ける
 - (5) 母国語の方が日本語よりも書ける
 - (6) どちらも書けない
4. 文化的能力
- 1) あなたが一番好きな音楽はどこの音楽ですか。
- (1) 日本の音楽が好き
 - (2) 母国の音楽が好き
 - (3) 日本、母国以外の音楽が好き
 - (4) 日本の音楽も母国の音楽も好き
- 2) あなたは自宅で食べる料理では何が一番好きですか。
- (1) 日本料理
 - (2) 母国の料理
 - (3) どちらも好き
 - (4) どちらも嫌い
- 3) あなたは外食をするときに一番行くお店はどこですか。
- (1) 日本料理
 - (2) 母国の料理
 - (3) 日本と母国以外の料理
 - (4) ほとんど外食はしない
- 4) あなたが一番好きな食べ物はどこの食べ物ですか。
- (1) 日本の食べ物
 - (2) 母国の食べ物
 - (3) 日本と母国の食べ物以外
 - (4) 好きな食べ物はない
- 5) あなたが一番尊敬するひとは誰ですか。
- (1) 両親等の親族のだけか
 - (2) 同郷の人
 - (3) 日本人
 - (4) 日本人、同郷以外の人
- 6) あなたは母国の行事を今も行っていますか。
- (1) 頻繁に行っている
 - (2) 時々行っている
 - (3) ほとんど行っていない
 - (4) まったく行っていない
5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
- [雑誌論文] (計 0 件)

〔学会発表〕（計 3 件）

① Chu Hyang Oh, Emiko Saito, A case study of acculturation and eating habits of Filipinos living in an urban area, The 16th East Asian Forum of Nursing Scholars, 22.Feb.2013, Bangkok, Thai.

② Chu Hyang Oh, Emiko Saito, The acculturation level and the use of health services among registered elderly, 12th International Congress of Behavioral Medicine, 30.Aug.2012, Budapest, Hungary.

③ Chu Hyang Oh, Acculturation and Asian immigrant health: Review of the literature, 14th East Asian Forum of Nursing Scholars, 11.Feb.2011, Seoul, Korea.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

呉 珠 響 (OH CHU HYANG)

首都大学東京人間健康科学研究科・助教
研究者番号：80511401

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし